



卓 話



1000回記念例会特別卓話

「江戸に学ぶ「まち」づくり」

東京学芸大学名誉教授 東京都江戸東京博物館館長
徳川林政史研究所所長 竹内 誠氏

江戸時代の最大の特色は、約230年間（2世紀半）に渡り一政権が国を平和に支配したことです。この様な例は他国に見ることが出来ません。これは日本が誇ってよい特色だと思います。



文明が発達すれば、人間は幸せになると考えられていましたが、20世紀は物量の時代で物が溢れ、結果21世紀は物より心、量より質の時代といわれています。これから考えますと江戸時代は何もない貧しい時代であったかもしれません。江戸時代といえますと飢饉や一揆の事件ばかり残っていますが、事件だけ歴史に特記される訳で、普通の生活は残されていません。

この時代お米は行き届いており、米価もかなり安かったのです。市場の操作も上手くなく、余り過ぎて酒造りを奨励していました。落語では文盲ばかりでできますが、実際はそうでなかったと考えられます。確かにパラダイスではなかったでしょう。一般的に知られている事は真実でしょうが、これは内部評価です。第3者評価すなわち外部評価といって、日本に来た外国人が日本をどう捉えていたかを研究しなければ、江戸時代を客観的に見ることが出来ない事に気がついたのです。キリスト教宣教師、鎖国時代の長崎の商館長、シーボルト、モース、シュリーマン、スエンソン等の書簡を基に日本論・日本人論ができるのではないかと。外国人は色々な国々を廻って来ていますので、比較が出来る。勿論間違いは沢山ありますが、それは正せばよい事です。

1. 徳川の平和

私達は江戸時代を殺伐とした時代のように考えていますが、「この国は平和、行き渡った満足感、豊かさ、完璧な秩序、そして世界のどの国にもましてよく耕された土地が見られる」（「シュリーマン旅行記」）とあります。

平和だと文化、経済が発達するといわれますが、江

戸時代は三貨が流通し日々相場が変動していましたし、それが庶民の日常にも浸透していました。

2. 緑と水の「まち」－自然との共生－

「日本人の国民性の著しい特色は、下層階級でもみな生来の花好きであると言う事だ。気晴らしに始終好きな植物を少し育てて、無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものとすれば、日本の低い層の人々は、イギリスの同じ階級の人達に較べると、ずっと優って見える。」（フォーチュン「幕末日本探訪記」）

江戸時代は階層に拘わらず園芸が好きで、普段の生活に四季折々の移ろいを取り込んで生活していました。四季はゆっくりと動いて行きますから、これはスローライフに通じます。現代人との違いは、時に関する概念だと思うのです。現代人は「時は金なり」で動いていて、一刻一刻をお金に換算してしまっていますが、これに対し江戸時代は暮しぶりにゆとりが感じられます。又江戸は緑が大変多く、清潔であったそうです。設備が整っていたと言う事です。私は高層ビルに反対ではないですが、町造りに関しても現代は無計画に乱立し街並みの整備が出来ない為、景観がまずくなっています。それと、どんなに立派な建物でも、そこに住まう人が感じられなければならないと思うのです。町造りとは人造りでもあるのです。いくら外側を立派にしても中身がないといけない。

3. 人にやさしい「まち」－両側町－

「人気の荒々しさに似ず、道を問へば下賤の者たり共、己が業をやめ、教えること叮嚀にして、言葉のやさしく恭敬する事、感ずるに堪たり。」（「江戸自慢」）

この優しさはホスピタリティに通じます。又日本橋の室町を例にあげますと、広い道を挟んで同じ町内です。向こう三軒両隣が最小のコアになって向こう側に買い物に行く、遊びに行き来する、町内単位で行動する。この様な親密感が地域教育にも通じて、先の親切な教える「まち」になります。

4. 活気あふれる「まち」－名所めぐりと名物－

「夫は未明より草履・草鞋にて棒手振りなどの家業に出るに、妻は夫の留守を幸ひに、近所合壁の女房同志寄り集まり、己が夫を不甲斐性ものに申しな

し、(中略)或は芝居見物そのほか遊山物参り等に同道いたし、雑司ヶ谷・堀の内・目黒・亀井戸・王子・深川・隅田川・梅若などへ参り、またこの道筋、近来料理茶屋・水茶屋の類沢山出来たる故、右等の所へ立ち入り、又は二階などへ上り金銭を費して緩々休息し(後略)」

男尊女卑と考えられがちな時代ですが、この様に実態は疑問で男女問わず日常を楽しんでいたようです。

5. 子どもの声が聞こえる「まち」

「日本人は多産な民族である。そこいらじゅう子供だらけで、その生き生きとした顔、ふっくらした身体、活発で陽気なところを見れば、健康で幸せに育っているのがすぐにわかる。まだ小さくて歩けない時は母親や兄姉が背中におぶい、とてもよく面倒を見る。(中略)少し大きくなると外へ出され、遊び友達に交じって朝から晩まで通りで転げまわっている。」(スエンソン「江戸幕末滞在記」)

「まち」の将来を考える時、まず子供をみればわかります。先の子供達が大きくなって担う将来なら良い国になるだろうという事です。教育の結果はすぐには出ませんから、ゆとり教育は大切だと思います。

寺子屋の普及—世界の識字率—

「教育はヨーロッパの文明国家以上にも行き渡っている。清国をも含めてアジアの他の国では女達が完全な無知の中に放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きができる。」(シュリーマン)

当時は男女問わず寺子屋に行かされたので、かなりの識字率だったようです。

6. 黄表紙を読む

識字率が高かったわけですから、出版物が沢山ありました。

恋川春町「金々先生栄花夢」貧乏人がベンチャー企業で儲けようとしたが、やはり故郷がいいと帰っていく話。唐来参和「莫切自根金生木」金持ちが貧乏になろうと苦戦するが、叶わず諦める話。ふざけたナンセンスな内容ですが、人生の含蓄があり、これで学んでしまうわけです。このような「ユーモア」=「ゆとり」を読んで成長していったようです。

「まち」造りの基本には、「人」がどう作られていくかが大事で、その「人」を基にしていい「まち」が出来ていくと思っています。特に今は地域喪失です。東京を再生するには是非地域というものを考えて頂きたいと思います。